

## 「妖しの世界への誘い ―谷崎・乱歩・横溝」展を開催して

永井敦子

二〇一一年十月一日から十二月二十五日まで、芦屋市谷崎潤一郎記念館で「妖しの世界への誘い―谷崎・乱歩・横溝」展を開催した。七十四日間の会期中、四二五三名の来館があった。前年度の同時期と比較し、一・五倍の入場者数となっている。

これまでの特別展では、志賀直哉や佐藤春夫など、谷崎と交流の深い作家との関連を企画してきたが、今回は大正期に多く書かれた谷崎の探偵小説に焦点を当て、ミステリー界を牽引した江戸川乱歩と横溝正史という、二大巨匠との関連を取り上げた。立教大学・大衆文化研究センターに乱歩資料を、横溝資料については二松学舎大学附属図書館から主に提供を受けることが出来、開催が可能となった。さらにご遺族や関係者、横溝正史館など、多くの方々からご協力が得られ、小さな個人館ながら、一〇〇点程の出品数となり、貴重な資料に恵まれた展示となった。

乱歩も横溝も関西にゆかりの深い作家でありながら、資料の多くが東京にあることから、資料の選定は主に神奈川近代文学館「大乱歩展」（二〇〇八年開催）の図録や、乱歩の文学アルバムなどを参考資料とした。そして、大衆文化研究センターに何度も電話やメールで問合せをし、該当資料を探して頂くなどの労をおかけした。

展示室は三つの展示ケースから構成されており、谷崎・乱歩・横溝の順でそれぞれの人生や文学について紹介した。導入として、入口の小ケースで「日本探偵小説の黎明期」と題し、立教大学からお借りした、『楊牙児奇獄』や黒岩涙香の『無惨』、『幽霊塔』などの書籍で、谷崎はじめ、乱歩ら探偵小説作家たちが影響を受けた作品を紹介した。

そして、第一の展示ケースでは、谷崎の探偵小説について、弊館所蔵品を中心に紹介した。乱歩が愛読し

た谷崎の『金色の死』や、佐藤春夫・芥川龍之介の探偵小説とともに谷崎の探偵小説が収録されている『日本探偵小説全集』（改造社、一九二九年）などを展示。そして、「新青年」編集者の渡辺温が谷崎宅に原稿依頼をした帰路に事故死したエピソードを紹介し、渡辺の死が縁となって「新青年」に掲載された、谷崎作「武州公秘話」の原稿を展示した。一般には知られていないエピソードゆえ、渡辺温の写真や逸話に来館者は興味を魅かれたようだった。

第二展示ケースで、乱歩の人生や作品、そして谷崎とのエピソードを紹介。立教大学からお借りした、「二銭銅貨」や「人間椅子」の草稿、ムービーカメラ、還暦祝いのジャンパーなど、貴重かつ見て楽しい資料が多く、乱歩独特の世界が再現されるように努めた。今回残念だったのが、「貼雑年譜」の傷みが激しく、現在データ化しているとのことでお借りすることが叶わなかったことである。しかし、複製（個人蔵）をお借りし展示することが出来た。精巧な複製ゆえ、乱歩の驚嘆すべき整理癖が如実に表れており、来館者は圧倒

されたようだった。また、今回は単に乱歩・横溝の紹介ではなく、谷崎との交流や影響を紹介することが主眼となっていることから、乱歩が人を介して手に入れた谷崎直筆の掛軸や、戦後に乱歩が訪問した京都・谷崎邸の写真パネル、そのときの様子を横溝に語った乱歩書簡（写真）なども紹介した。さらに、谷崎と乱歩の共通する世界観を紹介するため、両者がともに好んだ棟方志功の装丁本なども展示した。

最後の横溝正史コーナーでは、谷崎が題字を書いた『真珠郎』や、横溝の礼状に対する谷崎直筆返信書簡、原稿などの借用資料を中心に展示し、谷崎と横溝の交流や乱歩との深い関係などを紹介した。大正一四年～一五年に書かれた乱歩宛横溝書東集は中央の展示ケースに絞って展示した。若かりし頃の横溝が乱歩に書き送った書簡は、その数の多さと自由に書き綴った横溝の筆跡から、乱歩を慕う心情が溢れており、二人の交流の一端を顕著に表すものであった。

弊館には展示室が一つしかなく、三人の生涯や文学、交流関係を紹介

するにあたって十分な広さとは言えなかった。かといって展示品を詰め込むと見辛くなり、三者の関係といった文脈や時代背景、独特の雰囲気などが伝わらなくなる。そのため、準備段階で十分に資料を吟味・選定し、最も見て頂きたいものや代表的な資料だけに絞って展示した。作品世界の比較や共通点なども紹介したかったが、予算やスペースの関係上、補足説明は最小限に抑え、資料を中心とした展示となった。また、毎週土日のギャラリートークでは、来館者の反応を直に感じることが出来、展示品の背景までお話しすること、より興味を持って頂けたと思う。

アンケート（一五〇名回答、回答率三・五％）を見ると、三者の関係を初めて知ったという回答が最も多く、興味を持って見て頂けた様子うかがわれ、当初の目的は達成されたと見える。乱歩や横溝のファンも多く、特に関西では見る機会の少ない両者の直筆原稿や書簡に満足されたようである。小説の内容なども含めて、もっと詳しく知りたいと熱望される回答も多く、展示方法の改善もふまえて今後の課題にしたい。年

齢層としては、四十代が三割と最も多く、次いで五～六十代が二・五割、二～三十代と七十代が一割となっていた。しかし、大学のゼミでの来館がいくつかあり、若い世代で賑わった印象も強い。また、初めて来館したという方が七割で、乱歩や横溝の資料を観るため、埼玉や九州など遠方から来られた方が数名おり、中にはミステリー作家の姿も見られた。乱歩ご遺族の平井憲太郎氏も東京からお越し下さり、大きな励みとなった。これまでは、館が芦屋にあることから、「細雪」や昭和の名作群を展示に取り上げることが多かった。しかし、今回の展示によって、そうした従来の谷崎文学のイメージとは異なる側面が加わり、ミステリーファンなど、新たな客層を獲得できたのは大きな収穫であった。

展示の宣伝として、弊館の指定管理者である読売新聞社が紹介記事を数回掲載した。さらに「関西とミステリー」という特集（全八回）を組み、その紙面の別枠で展示品を一点ずつ紹介した。芦屋市の広報紙や他新聞でも大きく取り上げられたことも集客につながった。展示に先駆け

て、谷崎の生涯を祝う「残月祭」(七月二十四日開催)で同名のタイトルの下、作家の有栖川有栖氏の講演と、有栖川氏、平井憲太郎氏、山口直孝氏(二松学舎大学教授)によるシンポジウムと連帯して開催したことから、長期にわたって宣伝を展開することが出来た。また、展示中の関連イベントとして、ご遺族の横溝亮一氏や戸川安宣氏(東京創元社)、野村恒彦氏を講師としてお招きし、ミステリー講座を開講した。ここでも熱心なミステリーファンが遠方からも来られ、熱気に包まれた。

谷崎と乱歩、横溝という異色の組み合わせながらも開催出来たのは、快く資料をお貸し下さった方々のお力添えによるものです。乱歩資料に關しまして、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターと大学図書館の皆様には、準備段階から多大なご助力を頂きました。センター長の藤井淑禎先生、資料の調査を頂いた落合教幸氏を始め、新田由紀子氏、院生の皆様に心より感謝申し上げます。  
(芦屋市谷崎潤一郎記念館学芸員)

